

【卒業生寄稿】

高木 光暢
三井物産株式会社
(1992年卒業)

ポルトガル語学科の新生のみなさん、ご入学おめでとうございます。そして、在校生の皆様も新たな1年を迎え、期待に胸を膨らませている事かと思えます。

私は現在、三井物産株式会社で世界各国の人々のより良い暮らしづくりに貢献する為の大型インフラプロジェクトを手掛けています。最近では世界最大の鉄鉱石生産・販売会社であるブラジルのヴァーレ社と組み、アフリカのモザンビークで総額約1兆円の石炭の炭鉱、鉄道、港湾開発プロジェクトを担当し、実現しました。何もなかった場所に新たに900km以上の鉄道や港湾を建設し、今では同国最大の輸出企業となった現地事業会社(従業員約8000人)の経営メンバーとして同社の運営にかかわりながら、国創りに貢献しています。

大型プロジェクトは、相手国政府やメーカー、建設会社、銀行、弁護士/会計士などの専門家たちや、何よりそこに暮らし働く人々が国境を越えて、立場を超えて、力を合わせることで出来上がりますが、プロジェクトをとりまく多数の関係者の利害を調整し、リードしていく為には、プロとしての高度なスキル、実務能力、専門知識をバランス良く持ち合わせている事は勿論、何よりも担当者の「人間力」が鍵となります。

この「人間力」とは、社会人、日本を代表する企業の一員として、教養・人格・人間味にあふれる魅力とバランス感覚を持ち、相手との意見の相違や異なる文化環境の違いをも包容した上で相手を魅してやまない力、信頼を得る力の事であり、発揮する為には英語を最低限とする実践的な語学力に加え、多様な国々の関係者を束ねていける高いコミュニケーション能力が不可欠です。ビジネスの場でポルトガル語等の第二言語が話せると、相手と一気に打ち解けたり、雑談で本音を引き出せたりと、大変強い武器となります。

30年前は地方の普通の高校生だった私の価値観や思考を押し広げ、この「人間力」を鍛え、その後の世界への道筋を開いてくれたのは、上智大学での忙しくも充実した大学生活とポルトガル語との出会いだといっても過言ではありません。

私は学生時代、現在のソフィアタワーの場所にあった学生寮（定員 200 人、四畳半、二人一部屋）に住み、体育会洋弓部に所属し、厳しい上下関係に翻弄されながら真田堀のグラウンドで朝から晩まで練習に明け暮れる一方、出席の厳しい語学の授業に追われる日々でした。四谷キャンパスの外に出る事が少なく、24 時間常に学内で誰かと一緒に過ごさねばならない環境は、落ち着けず、なかなか厳しいものがありましたが、半ば強制的に大勢の人々と接し、揉まれ、様々な意見や価値観の方と濃密な時間を過ごす経験を得た事は、社会に出てからとても役立ちました。

大学3年生の時には1年間の交換留学に派遣され、ブラジルのミナスジェライス州で現地生活を経験、ブラジル人の明るくも逞しい国民性に触れて刺激をうけました。会話するにも最初は動詞の活用すら心許なく、「Eu entendeu ではなく、entendi だよ」と口を開く度に直される程でしたが、次第に上達し、留学期間の最後にはポルトガル語で自在に、異文化とコミュニケーションをとる楽しさを学んだ事も自分に新たな可能性を広げてくれました。私が商社に入り、リオデジャネイロに二度駐在し、ブラジル企業と様々な仕事を創り、次にステージを変え、ブラジル企業と一緒にポルトガル語圏アフリカのモザンビークで人々の暮らしに役立つ仕事を創ることができているのも、この留学経験とその気付きや思いがあったからだと思います。

貴重な学生時代をどう過ごすか、いかに充実して過ごすか、そして、その間にどのように「人間力」を磨けるかが、これからのみなさんの人生の可能性を大きく左右します。どうか色々な事に挑戦し、たくさんの人とめぐり合い、多様な価値観に触れてみて下さい。そして、これからポルトガル語の世界が導く運命の旅を楽しんで下さい。